

有明海水産資源回復技術確立事業*

ウミタケ養殖技術開発試験

重久剛佑

有明海水産資源回復技術確立事業において、ウミタケの養殖技術確立を目的として、種苗生産した稚貝と散逸・食害防止を目的とした飼育容器を用いて養殖試験を行った。今年度の試験においては、容器への適正収容密度及びサイズ、容器の深さによる成長差について明らかにするため比較試験を行ったので、その概要を報告する

方法

(1) 干潟移植試験

ウミタケの容器への適正収容密度を検討するため、2023年2月22日に多良川河口干潟(図1)において、散逸・食害防止のため、図2に示す容器(以下、同じ。アロン化成収穫カゴ:直径37cm×高さ28cm)に食害防止のための目合1mmのネットを設置し、現地の底泥を入れた後、表1に示す試験区で試験を実施した。2023年6月に生残及び殻長、重量を測定し、各試験区の成長の比較、目標サイズである殻長60~80mm、重量200~300gに達しているかについて確認を行った。

(2) 生息深度試験

ウミタケは殻長の10倍以上潜泥するが、容器に収容しているため、潜泥深度や成長が抑制される可能性があることから、容器の深さの違いにより成長差の比較試験を行った。2023年1月25日に有明水産振興センター内の300L水槽に内部をベントナイトで満たした容器(縦22.5cm×横22.5cm×深さ12cmまたは30cm)に収容し、表2に示す試験区で試験を実施した。試験条件は、珪藻類1~10万cells/mL・日を給餌し、2023年6月6日に殻長の測定を行い、各試験区の成長の比較、目標サイズである殻長60~80mmに達するかについての確認を行った。

結果

(1) 干潟移植試験

各試験区の試験結果を表1に示した。各試験区ともに取り上げ個数は0~2個と生残率としては0~20%と生残率が低かった。また、サイズは43.8~46.4mmであり、目

標サイズには達しなかったことから、養殖業として成立する可能性は低いと考えられた。

(2) 生息深度試験

各試験区の殻長の推移を図4に示した。試験終了時の平均殻長は、①は39.3mm、②は38.4mm、③は28.7mm、④は35.0mmであり、容器の深さによる成長の差はほとんど見られなかった。また、目標サイズに達しなかったことから、養殖業として成立する可能性は低いと考えられた。

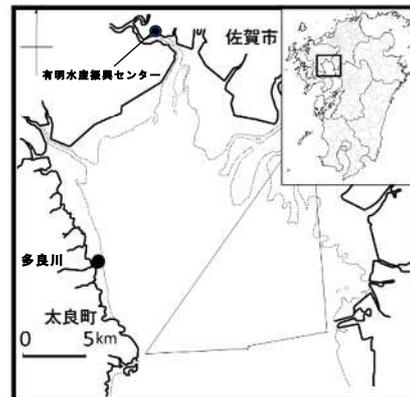


図1 試験地点



図2 干潟移植試験容器



図3 生息深度試験

*国庫補助事業名:有明海漁業振興技術開発事業

表 1 干潟移植試験の試験区及び結果

試験開始時		試験終了時		
殻長(mm)	個数(個)	殻長(mm)	重量 (g)	個数(個)
9	10	43.8,46.4	48.7,70.0	2
9	30	43.9	39.2	1
30	10	-	-	0
30	20	-	-	0

表 2 生息深度試験の試験区

試験区	殻長(mm)	収容数 (個)	容器の深さ (cm)
①	20	15	12
②	20	15	30
③	7	20	12
④	7	20	30

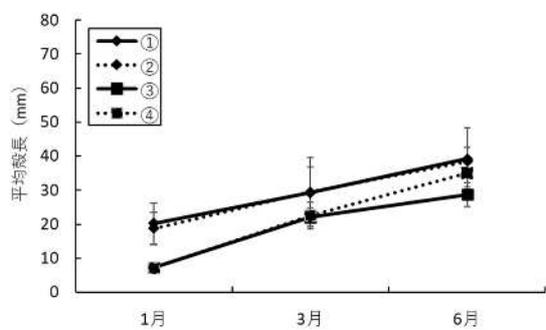


図 4 生息深度試験における平均殻長の推移